

北京日本学研究中心

通 讯

(第 3 9 号)

责任编辑：清水展 吴咏梅

邮政编码：100081 Tel : 8424893 1994. 7.1

简 讯

- ◇ 6月20日：社会研究室在二层师生活动室开展活动，由吴咏梅发表了题为〈日本的夫妻关系—以中年期夫妻关系的满足程度为中心〉的论文。6月27日：熊谷圭知先生作了〈日本风土论的现在—为构建比较风土学的序论〉的报告。周维宏即将赴日搞共同研究，他将在7月4日的研究会上就他的研究课题〈农村工业化的比较研究〉向大家作简单的介绍。
- ◇ 6月22日下午2:30：“中心”客座教授中日友协会长孙平化先生在电教3作了〈日本的最近政局〉的报告，孙先生一直从事中日友好交流事业，以他敏锐的洞察力和丰富的经验，对日本当前的政局发展动态作了大胆的推测，报告生动有趣。
- ◇ 6月23日下午2:00：第11次公开讲座在“中心”3层电教室举行，田所宽行先生作了〈初期郑重语的一个事例—古今集词书〉的报告。至此本学期的公开讲座全部结束。
- ◇ 6月23日下午7:00：日本古典文学研究会在师生活动室开展活动，蒋义乔以〈中国古典文学中的「艳」〉为题进行了发表。6月30日的最后一次研究会（第7次）上，将进行古典文学和近代文学的特别研究发表。
- ◇ 6月24日下午2:00：第8期中心客座研究员进行了研究成果发表，发表者和题目如下：胡令远〈周氏兄弟（树人、作人）日本文化观的异同〉；米强〈中日人间观与「和」的构造〉；林昶〈中国日本研究杂志沿革的初探〉。
- ◇ 学术出版动态：《日本学论丛V》（第3期院生优秀论文选）已经出版，《日本学论丛VI》（第4期—第6期院生、助教班第7期—第9期优秀论文选）已经交稿付印，预定年底出版。

青蛙的力量 — 《北京句坛》 结束之际

李 黑（辰巳正明）

娥眉月夜，难断虚渺情思，一个傻瓜。（英顺）

这首俳谐作为现代俳句要算一等品了。吟咏者在自虐性地咏叹男女间微妙的关系、思（丝）情难斩之时，天际中的那弯新月如同嘲笑一般发着皎冷的白光。这个评论是否恰当自不必说，但这实在是一个佳吟，水平超越了对男女关系不甚了解的李黑宗匠的评判鉴赏眼力。说到佳句，「叹息声中，桃夭纷落，春天的阵雨」（千浩）也是极好的俳句，这个作者具有常咏秀句的才能。

来到北京和中国的研修生们一起创办《北京句坛》，还是残冬三月底的事。研修生们丝毫没有创作俳句的经历，给予他们创作勇气和意愿的是芥川龙之介的「青蛙自问，身上彩漆，可是新刷的？」。从那个意义上来说这是佳句。后来，他们首次吟咏的俳句就排在了创刊号上，除了刚才的两句外，还能看到一行行出色的好作品。显然是超过了龙之介水平的佳作。以下是研修生们投在《北京句坛》上的名吟佳句，与其让宗匠进行笨拙的评价，不如呈献给大家，大家的意见才是最好的评论。

■吹笛送黄昏，雨中梨花香（钱女）■初恋，至今心留残痛（德默）■恰似年轻人的心，那秋空呀（严红）■新芽初长的树上，传来不知名的鸟声（赵诣）■嫩叶萌绿，撩目花心（海燕）■风熏香飘，今早一片茉莉花（胡林）■冬寒料峭，堆雪见菩萨（和顺）■暂借一枝雪中梅，昏暗窗口摆（姜女）■寂静中，簌簌飘落，是那雪声（卫华）■小蜘蛛，挂檐下，映晚霞（刘学）■唤醒醉汉的，冷冷春风（雪梅）■莲叶中，蹲着一只蛙（金树）■小河传来，婴泣声，山椒鱼（樊女）■好朋友哟，我若死了，请以美酒（淑兰）■旅途的星星，故乡的亲人，能看见吗（晓惠）■春来了，雁声传，我的妹妹哟（巴拉）■临暮秋，不常见，散花道上（巧珍）■春虽到，北风止，花不开（艳姝）■春雨下，槐花飘散落（慧欣）■庭院花，每年如春美（柄阳）■春过也，暖意仍照房中（君梅）■冬已逝，葱翠欲滴，田间麦苗（民华）■春风吹，夜间难眠，思恋我子（丽华）■庭园梅花开，我的阿梅哟（景朝）■园丘上，天与我是那么近（枫女）■人生如梦，早逝也（质清）

当然，在研修生们苦吟之际，我这个宗匠并没有诓骗大家，稍许透露一点看看吧。「释迦之屁，萦绕天下人间」「褪旧毛，而知天下之秋」这便是精粹。但不管怎么说，研修生们的俳句是连李黑宗匠都惊叹的名吟绝句。这么说，短歌中也有让人难以忘怀的。

生于世，疲命于衣食住，与其生死缘，还叹贫富命。（天奎）

在此，为感谢研修生们，李黑宗匠呈上一首激发勇气的送别《沁句》。

悠悠然然，是那观山的青蛙吧。

这样，《北京句坛》以青蛙开始又圆满地以青蛙结尾。完全是凭借青蛙的力量。不论是研修生们还是我们都希望平安无事地<回到>故乡。另外向以特别投稿的形式给我们寄来佳句的杜康草人、苏香津主人、个个生大人、花兰夫人、研究生的各位同学表示深深的感谢。

寸

感

玉井 敬之

在北京的生活已近四个月了。和日研中心的学生一起学习研究，对我来说是非常珍贵的经历。这是我第二次直接与中国的学生接触。

第一次是在1985年，我作为交换教授被当时的工作单位短期派遣到武汉大学，那也是我最初接触非留学生的中国学生。那时的学生大部分是本科生，而这一次是研究生，还有北京和武汉的差异，要说差别呢，不能直接对比，但也可以说出来吧。武汉的学生对诸如东京塔有几米高、东京的汽车牌照的颜色区别之类的问题知道得很多，而我对此却不甚了解。但他们绝不会知道从黄鹤楼远眺看到的对岸龟山顶上的电视塔有多高，而且似乎对这个也不感兴趣。对待外国的方法，自然因时代和人而异，那时，那些学生给我的印象是：他们倾注了全身心的热情来吸收日本特别是东京的事物。那也许是中国刚步入现代化道路之际的缘故吧，学生们眼中的日本是一个成功地实现了现代化的辉煌灿烂之国，在他们看来日本是中国应该学习的理想之国，一个梦一般的世界。

但是，我感到在此以后中国社会的巨大变革，也使学生的意识发生了变化，这个表现在对研究对象的接近方法上，十年前学生们对待日本采取全盘接收、同化的方式，而现在的研究生则表现了从中国的立场出发客观地看待各自研究领域的姿态。我认为这大概是基于一种自信吧，即当前中国的改革大致成功了，由此已经到达可以现实地看待日本现代化过程的地步了。

自三月三日赴任以来至今，在中国的生活每天都充满了感动和发现，再次觉得中国是个蕴涵深刻的国家。我想再一次重申：这次经历将作为珍贵的回忆深藏在我心中。

通知： 由于7月8日开始放暑假，「北京日本学研究中心通讯」7、8月将停刊，9月起重新发行。本学期得到大家很大的支持和关照，特此表示感谢，今后还望大家给予关照，把我们的「通讯」办得更好。

センター通信

(第39号)

1994. 7. 1

< ニュース >

◇6月20日：社会科学研究会（於：センター師生活動室）において、呉咏梅さんが「日本の夫婦関係：中年期における夫婦関係の満足度」というテーマで報告した。6月27日には熊谷圭知先生が「日本風土論の現在：比較風土学構築のための序説」というテーマで報告した。最終回（第8回）は7月4日に周維宏先生が報告の予定です。

◇6月22日：午後2：30よりLL教室にて、センター客員教授で、中日対外友好協会会長の孫平化先生が「日本の最近の政局」という報告をされた。先生は長年にわたり中日友好事業に携わってこられた経験をふまえ、現在の日本の政治状況に対して深い洞察と鋭い分析さらには大胆な予測もなされて好評を博した。

◇6月23日：午後2：00よりセンターLL教室にて第11回公開講座が開かれ、田所寛行先生が「初期丁寧語の一つの事例：古今集詞書の場合」というテーマで報告された。これで今学期の講座は終了した。

◇6月23日：日本古典文学研究会（於：センター師生活動室、7:00～）において、蔣義喬さんが「中国古典文学における《艶》」というテーマで報告した。6月30日の最終回（第7回）には、古典文学と近代文学の特別研究発表を予定している。

◇6月24日：午後2：00より、第8期センター客員研究員の以下の研究成果発表が行われた：胡令遠先生「周氏兄弟（樹人、作人）の日本文化観の異同」、米強先生「中日〈人間観〉および〈和〉の構造」、林先生「中国における日本研究の雑誌沿革についての初探」

◇学術出版動向：『日本学論叢V』（第3期院生優秀論文選）はすでに出版された。『日本学論叢VI』（第4～6期院生と研修コース第7～9期生優秀論文選）は年末の出版の予定。

蛙の力 — 『北京句壇』を終えて

李 黒（辰巳正明）

三日月やはかない情を切らぬバカ（英順）

これは現代俳句としては一級品である。男と女の微妙な関係、その断ち難さを自虐的に詠嘆するとき、それをあざ笑うかのように三日月が光る。こんな批評が適切かどうか、男女関係には疎い李黒宗匠の批評眼をはるかに超えた秀逸の作品だ。秀逸といえは「溜め息に桃夭萎る春時雨」（千浩）もまたいい句である。この作者はつねに秀句を詠むという才能をもっていた。

北京に来て中国の研修生たちと『北京句壇』を創刊したのは、まだ冬の名残の三月末のことであった。俳句経験のない研修生たちに創作の勇氣と意欲とを与えたのは、龍之介の「青蛙おのれもペンキぬりたてか」であった。その意味でこの句は秀句である。そして、彼らが詠んだ初めての俳句が創刊号に並んだ。そこには先の二句のほかに見事な秀句の行列を見たのである。明らかに龍之介を超えた力作であった。以下は研修生が『北京句壇』に投稿した名吟である。宗匠の下手な批評よりも、読者にこれらを示すことが何よりもよい批評だと思われる。

■笛吹きて黄昏送る雨に梨（錢女） ■初恋やいまも心に凍て残る（徳黙） ■若人の心に似たり秋の空（紅花） ■芽生え木に名前知らぬ鳥の声（趙詣） ■若葉萌え目にしみわたる花ごころ（海燕） ■風薫る今朝もいっばい茉莉の花（胡林） ■冬寒し雪の作ったゆきぼとけ（和順） ■雪の梅一枝借りて闇の窓（姜女） ■静かさやしんしんと降る雪の音（衛華） ■蜘蛛の子が軒から下がり夕焼けに（劉学） ■酔いどれを覚ます冷たい春の風（雪梅） ■蓮の葉に蛙一匹とまったり（金樹） ■小川から赤ちゃんの声山椒魚（樊女） ■よき友よぼくが死んだら美酒で（淑蘭）

■旅の星ふるさとの人見えるかな（暁恵）■春が来た雁声とどけわが妹よ（巴拉）■秋の暮れ
見つけぬ花の散る道に（巧珍）■春くれど北風やまず花咲かず（艶妹）■春雨やアカシアの花
散り落とす（慧欣）■庭の花毎年の春美しい（柄陽）■行く春やただ照りたまう部屋の中（君
梅）■冬すぎて緑したたる麦の苗（民華）■春風や夜中眠らず子を思う（麗華）■庭の木に梅
の花咲くわが妹よ（景朝）■園丘で天と私が近くなり（楓女）■人生や夢ほど早く去りにけり
（質清）

もちろん、研修生が苦吟していたときに、わが宗匠は鼻毛など抜いていたわけではない。そのほ
んの一端を披露すれば「釈迦の屈は天上天下をかけめぐり」「古い毛や抜けて天下の秋を知る」
などは極意である。しかし、何よりも研修生の句は、李黒宗匠も驚く名吟であった。そういえば
短歌にも忘れられないのがあった。

世に生まれ衣食住にて苦勞する生死縁より貧富命ゆえ（天奎）

ここで、研修生に感謝し李黒宗匠から勇気の出る送別の句を贈るとにする。

ゆうぜんとして山を見る蛙かな（一茶）

これで、『北京句壇』は蛙から始まり蛙でめでたく結ばれた。ひとえに蛙の力である。研修生も
我々も無事に故郷へ《かえる》ことを願うものである。また、特別投稿で名吟を寄せられた杜康
草人・蘇香津主人・个个生大人・はない夫人・院生諸氏にも感謝もうしあげる。

一寸 感

玉井 敬之

北京の生活もすでに四ヶ月近くなった。日本学研究センターでの学生とともにした研究と学
習は、私にとっては大変貴重な経験になったと思う。中国で直接に学生と接するのは、二回目
である。

最初は、一九八五年九月、交換教授として当時の勤務先の大学から武漢大学に短期間派遣され
た。留学生ではない中国の学生と接触した最初でもあった。この時は本科生が大部分であり今回
は大学院生であること、北京と武漢ということの違いがあって一概には言えないが、武漢の学生
は、東京タワーは何メートル、東京の自動車のナンバー・プレートの色の違いなど、それに類す
ることについては実によく知っていた。それは私の知らないことであった。しかし、黄鶴樓から
眺められた、対岸にある亀山テレビ塔の高さは知らなかったし、関心も持っていなかったよう
に思う。異国にたいする接し方は、時代や人によって違いがあるのは当然だが、その時、日本の、
とくに東京の事物については身体を傾けるような熱心さで吸収しようとしている印象を受けた。
それは中国が近代化の道を歩みだした頃だったのだろうか、日本はそれに成功した華々しい国と
して映っていたようである。日本は中国が学ぶべき理想の国、夢の国のように学生たちには見え
ていたらしい。

しかし、それ以後の中国の社会の大きな変化は、学生の意識にも変化が生じていることを感じ
させる。それは研究対象の接近の仕方にもあらわれていて、十年前の学生は日本にたいして殆ど
埋没か、同化するような接し方であったが、今度の研究生たちはそれぞれの領域を、中国という
場から客体視していく姿勢がみられるのである。これは、当面、中国の近代化がほぼ成功して
いること、それによって日本の近代化の過程が現実的に眺められる位置にまで至っている、その自
信から生まれているのではないだろうか、と思う。

三月三日に赴任して以来今日まで中国での生活は毎日が感動と発見に充ち、奥行き深い国で
あることを、あらためて感じた。繰り返すことになるが、この体験は必ずや貴重なものとして私
のなかに残っていくだろう。